

肥前大村・五島の疱瘡関連石造物について

Smallpox-related stone structures in Omura and Goto, Hizen

賈 文夢

Jia Wenmeng

肥前大村・五島の疱瘡関連石造物について

長崎大学 賈 文夢

Smallpox-related stone structures in Omura and Goto, Hizen

Jia Wenmeng (Nagasaki University)

要 旨

本論は江戸時代の旧大村藩・旧五島藩の疱瘡関連石造物の紹介と考察を行うものである。疱瘡関連石造物は「疱瘡」に感染して亡くなった人々の靈魂を慰めて、供養したモノである。それらは特定の人を埋葬供養した「疱瘡墓」と不特定多数の人々を供養した「疱瘡記念物」に分けられる。現在の西海市、大村市、時津町、五島市に存在する疱瘡石造物を調査して、石造物の建立年代、正面刻まれた銘、石造物の形状と建立する経緯によって分類した。それらの調査結果から疱瘡関連石造物の特徴を考察した。

疱瘡関連石造物の建立経緯は次の四つに分けられる。①疱瘡流行直後、多くの死者の靈を慰めるための建立。②隔離地で供養するための建立。③有効的な治療法の普及によって疱瘡の脅威が去った後の建立。④埋葬地であることが忘れられた後、墓石や遺骨などが再び見つかったことによる建立である。これらのうち、①の石造物は他の災害・疫病の記念石造物と共通である。②・③と④の石造物は疱瘡に対する隔離政策が生み出した石造物と結論づけた。

キーワード：肥前、大村、五島、疱瘡、疱瘡関連石造物、隔離

Abstract

This paper introduces and examines smallpox-related stone structures in the Hizen Omura and Goto. Smallpox-related stone structures are meant to comfort and hold a memorial service for the spirits of those who died after being infected with 'pox'. They can be divided into "Pox tombs", which are burial and memorial services for specific people, and "pox memorials", which are memorial services for an unspecified number of people. The author investigated the smallpox stone structures in Saikai City, Omura City, Togitsu Town and Goto City and classified them according to the age of the stone structure, the inscription engraved in the front, the shape of the stone structure and how it was built. Based on the results of the survey so far, the author examined the characteristics of smallpox-related stone structures.

はじめに

2021年春、新型コロナウイルスの世界中の感染流行に伴い、日本国内で第4波が猛威を振るい始めた。目に見えぬウイルスへの畏怖は大きく、今も患者、罹患者と患者の家族、いわゆる「濃厚接触者」たちは病院、ホテル、自宅に隔離されている。このような状況は昔からも存在する。

天然痘というウイルスは、6世紀に仏教が伝来したとき、大陸からの渡来者群によって伝わったとみられている（立川 1984）。天然痘の学名は「痘瘡」、それ以外の俗名として「疱瘡」、「豌豆瘡」、「裳瘡」などと呼ばれた。本稿では「疱瘡」と呼んでいる。江戸時代に入ると、特に18世紀から日本国内で頻繁に流行した。

しかし、1796年にイギリスの医師エドワード・ジェンナー（Edward Jenner）によって牛痘が発見されたことを機に克服へと向かった。日本でも嘉永元（1848）年に来日したオランダの医師モーニッケは次の年に種痘の方法を長崎の出島で授けた。以後、日本国内に予防法が伝わり、疱瘡は克服されていった。

そして、江戸時代の大村藩と五島藩は、「無痘地」とされていた。無痘地とは文字通り、「疱瘡の流行しない地方」である。しかしながら、実際には疱瘡との関連を示す多くの石造物が存在している。

本稿では江戸時代の大村藩と五島藩（図1）における疱瘡関連石造物を分類した上で、その特質を分析し、「無痘地」のこれらの地域の疱瘡流行の実態について考察を加える。

1 大村藩と五島藩の疱瘡対策

種痘が普及する前、疱瘡が恐れられていた頃、地域によって、流行時の痘瘡対策が異なっていた。その中でも大村藩や五島藩の対策は特殊なものとされている。

疱瘡は強い感染症として、通例、七年に一度、大流行すると言われた。熊本藩細川侯の侍医・村井琴山が天明8（1788）年、疱瘡に関連した書物を一冊にまとめた『痘瘡問答』という書物があり、その中で、日本における疱瘡の流行の周期に関して、次のように言明する。

「我邦ニテハ七年一回、此病大ニ流行ス。中華ノ痘書ニ見ヘサル所ナリ。夕、大都市ハ終年処々コレヲ患トイヘトモ、亦七年一回大ニ流行ス。コレ地方ノ異ナル処ナリ。」

このように、「大都市」と「地方」では、疱瘡は異なる類型で流行する。そして、疱瘡流行の対策にも異色の形態が存在する。「大都会」では疱瘡は主に小児の流行病となった（香西 2019）。都市の人口密度が高く、疱瘡は常在病として、流行した時には多くの子どもが亡くなった。しかしながら、疱瘡は一回性の特徴をもつと認識されている。小児のうち一度だけ罹る経験があれば、生涯において二度と繰り返されないのである。「大人事」として、都会の疱瘡は避けられぬ病とされていた。一方、「地方」は地勢や生業が異なり、対策形態もまちまちであった。「地方」の中で、疱瘡がまったく流行しない土地も存在する。すなわち、『痘瘡問答』の問答16で、次のように言明している。

「(前略) 然リトイヘトモ、我カ肥天草一郡ノ人ノ如キ、コレヲ避クレハ一生コレヲ患ヘス。肥前ノ五嶋・平戸・大村、紀州ノ熊野ノ如キモ亦同シ。(後略)」

また、橋本伯寿の『断毒論』にも「本邦、豆の八丈島、信の御嶽・秋山、飛の白河、北越の妻有、紀の熊野、防の岩国、予の露峯、土の別枝、肥の大村・天草・五島、奥の蝦夷、古より今に至るまで、皆能く痘の伝染を避く。」という記録がある。

このように疱瘡が流行せず、一生疱瘡を患わない場所は「無痘地」と呼ばれた。肥後の天草、肥前の五嶋・平戸・大村、紀州の熊野は「無痘地」として存在した。

そして、同じ「無痘地」の中でもその習俗は異なっていた。香西は「無痘地」における習俗を「遠慮」・「送捨て」・「逃散」の三つに分類している（香西 2019）。その中で、本稿で扱う肥前大村・五島では「送捨て」と「逃散」が見られたという。「送捨て」とは、疱瘡患者を遠隔地の仮小屋に収容する対策であり、「逃散」とは、その対策から逃げ、疱瘡流行地から離れる行為であった。しかし、「無痘地」での疱瘡の流行に行き合わせることは非常に稀だったため、関する記録の大半は伝聞として記されており（香西 2019）、正確な実態は知られていない。

2 疱瘡関連石造物について

疱瘡関連石造物は、特定の人を埋葬供養した「疱瘡墓」とそれ以外の記念物に分けられる。人は亡くなった後で埋葬されて、墓が建立されることが一般的である。疱瘡は致命率が高い伝染病として、流行し、多くの死者が出た。疱瘡に感染して亡くなった人々の墓は「疱瘡墓」と呼ばれ、旧大村藩領や旧五島藩領でも、いくつかの「疱瘡墓」が確認されている（図2）。

例えば、平成11（1999）年に大村市の雄ヶ原町の山中で、大量の疱瘡墓が発見された。翌年、大村市教育委員会により発掘調査が行われ、雄ヶ原黒岩墓地と名付けられた（大村市史編さん委員会編 2013）。墓碑としての石造物36基が発見されている。また、令和2（2020）年に、長崎県東彼杵郡波佐見町の中尾山地区で、「波佐見町文化的景観に関する基礎調査」の墓地調査を行った際に、山の奥に疱瘡墓も発見された（野上・賈 2021a）。白岳348墓地と葉山138墓地の2ヶ所の墓地合わせて12基以上の疱瘡墓が確認されている（野上・賈 2021b）。

そして、いわゆる「墓」以外にも供養塔など記念物がある。災害や疫病で多くの犠牲者が出た際にも供養塔が建てられることが多い。例えば、長崎市には享保6（1721）年に大洪水が発生して、大量溺死者が発生している。洪水が収まった後に死者を供養するために、青銅塔（からかねとう）を建立していた（図3）。

その他、疱瘡以外の感染症で亡くなった人々の慰霊碑もある。例えば、山形県米沢市赤芝町の羽黒神社境内にある虎列刺菩薩の石碑が存在する。明治12（1879）年には全国でコレラ大流行、死者は10万人に及んだといわれている。米沢では8月に白布温泉で発生した。赤芝の村人が村中安全とコレラの終息を祈願し、死者を慰霊するためにこの石造物を建てた（米沢市公式ホームページ）。

疱瘡で多くの犠牲者が出た場合も同様である。旧長崎天領では一の瀬無縁塔と茂木道無縁塔などの疱瘡記念石造物が確認されている。長崎市の本河内2丁目1番、新長崎街道の南側に、一の瀬無縁塔がある（図4）。寛文2（1662）年に長崎に疱瘡が流行し、死者2318人に及び、特に嬰兒の夭折が多かった。そのため死んだ子どもたちのために、長崎総町をあげてこれを悲しみ供養した。昭和50（1975）年に市指定有形文化財になった。一方の茂木道無縁塔は、長崎市上小島2丁目13番にある（図5）。正徳2（1712）年に痘瘡が流行し、翌年3月まで三千余人の患者が出たといわれている。この時の死者（主として子ども）を供養し、併せて長崎の町に病気が入ってこないように祈念するため茂木道に供養塔が造られたのであろう。一の瀬無縁塔と同時に昭和50（1975）年に市指定有形文化財になった。

このように石造物は人の死や死につながる災害や疫病の事実を示す有形の物質資料であるが、疱瘡墓については、別稿で改めて述べるとして、今回は、旧大村藩と旧五島藩に所在する疱瘡墓以外の疱瘡関連の供養塔などの石造物を対象としたい。

3 旧大村藩領の疱瘡関連石造物

3-1 西海市の疱瘡関連石造物

『西海町郷土誌』によると、現在の西海市に疱瘡に関する石造物（図6）が存在する（西海町教育委員会 2005）。石造物を確認するために、2021年5月2日に現地調査を行った（図28・29）。調査者は筆者の他、野上建紀（長崎大学多文化社会学部・多文化社会学研究科教授）と田中正幸（長崎大学多文化社会学部3年）である。

3-1-1 木場郷の柴山宝塔

『西海町郷土誌』の記念碑・宝塔付録には以下のように書かれている（西海町教育委員会 2005）。

「昔、疱瘡患者を隔離した避病舎の跡といわれる。所々に散在した墓碑を、柴山開拓の移住者が合葬したと伝わる。碑の台石の周囲には、俗に疱瘡墓と言われる石碑が使用されていると考えられる。」

柴山宝塔（図7）という石造物は、疱瘡に関する宝塔である。柴山という地名は現代の地名ではなく、当時開拓された時に使われた字名である。

宝塔は現在の木場郷サービスセンター「道の駅さいかい」の南東約3キロ、「(株)西九州第5センター」という事業所の北東面、民家前の道路から森の中に入った、山の奥にある（図8）。

石造物の形状は不定形の自然石である。宝塔の正面（図9）には「南無妙法蓮華経日蓮大士」、「天下泰平」と「国立安穩」、右側は「大正五年十月吉日」（1916）、左側は「柴山白仁田中建之」と刻まれている（図10）。また、宝塔の第一層土台には建立者の名前と郷名が刻まれていた（図11）。それらの氏名と郷名から宝塔の供養する範囲は木場郷、丹納郷、川内郷、古里郷と大串村と推定される。第二層土台は墓碑（図12）が利用されている。疱瘡墓碑は4基である。

それらの中で、判読できたのは四つの戒名と三つの没年月日である。それぞれの戒名と没年月日は以下の通りである。

墓1 「妙法受○院妙讚」「元文元辰天十月二十八日」（図13）

墓2 「法名釈教春霊」「元文二丁丑天二月上旬四」（図14）

墓3 「皈元妙随信女」「宝曆四戌二月廿九日」（図15）

墓4「妙法林雲信士」(図16)である。

判読できた墓石の中で最も古い没年の刻年は元文元(1736)年、そして、最も新しい刻年は宝暦4(1754)年である。『西海町郷土誌』には今回判読できた三つの年号以外に「寛保元(1741)年」の墓碑の記載もみられる(西海町教育委員会 2005)。墓石の大きさと形状にあまり違いは見られない。

一方、宝塔周囲の森の中には、自然石の集積がみられる(図17)。これらは石組墓(石積墓)と見られる。これらの石組墓の性格は不明であるが、長崎県五島市の前島・江ノ浦にも一般的な墓石をもつ疱瘡墓と石を集積した石組墓が共存している事例がある(図18)。江ノ浦墓地の石組墓は疱瘡墓と潜伏キリシタン墓の両方の可能性が存在する(野上・買・石橋 2022)。

3-1-2 横瀬浦の靈魂塚

令和元(2019)年5月23日付けで西海市西海町横瀬郷の平尾墓地と花川墓地にある「横瀬郷の靈魂塚」が西海市の有形文化財に指定された。

平尾墓地は長崎県西海市西海町横瀬郷2972番地1、国道202号の路肩にある。平尾墓地にある石造物の形状は角柱状であり(図19)、正面には「靈魂塚」と刻まれている。側面には「嘉永戊申(1848)年オランダ医師が牛痘接種による予防法を普及した。横瀬浦村の疱瘡感染者の隔離場所となっていた山が閉鎖され、それまでに感染して亡くなった人々を合葬した。そして、嘉永5(1852)年壬子十一月に靈魂塚を建立した。」という内容が刻まれている。

もう一ヶ所の花川墓地は、同じ西海町横瀬郷の2878番地にある。横瀬東公民館から道沿いに花川墓地の入り口(図20)がある。靈魂塚は墓地の中心部からやや北にある。角柱状の石碑の正面には「南無阿弥陀佛」と「南無妙法蓮華經有縁無縁法界塔」の二列の文字列が刻まれている(図21)。側面には平尾墓地の靈魂塚と同じ内容が刻まれている(図22)。建立年代も同じである。

『松香私志』には、「嘉永3(1850)年正月から牛痘種法は制度化され、その後三年目の嘉永5(1852)年、大村藩領内疱瘡で亡くなった人は一例でもない。同年八月藩主は功労を賞して、廩禄も増加せられた。」とある(日本医史学会 1958)。したがって、この二つ靈魂塚は、大村藩内種痘の実施が成功したことを受けて建立されたものである。

また、花川墓地靈魂塚の正面には二種類の宗派の言葉が並列に刻まれていた。南無阿弥

陀仏を唱える浄土宗などの念仏、南無妙法蓮華経は日蓮宗で唱えられる題目である。花川墓地の靈魂塚は宗派を超えて霊が供養されたものである。

3-2 大村市の疱瘡関連石造物

前に述べた大村市の雄ヶ原黒岩墓地の他、旧大村藩の萱瀬村にも疱瘡関連石造物が存在する。長崎県大村市中心街から北東にほぼ8キロ、山沿いの旧道の路傍に存在する(図23)。2021年7月2日に現地調査を行った。調査者は筆者の他、野上建紀と石橋春奈(多文化社会学研究科博士前期課程1年)である。萱瀬村『郷村記』の「靈魂塚之事」の項には以下のように書かれている(大村市史編さん委員会 2013)。

「高サ六尺程の野石なり、石面に靈魂の文字を鐫す、其下に細字の銘文あり略之是ハ元文三年田下郷に疱瘡大に流行、其病に罹て死亡の者凡六拾有余人なり、依て其靈魂を弔はんが為に、此所に石碑ヲ建祀之と云ふ。」

元文3(1738)年田下郷に疱瘡が大流行し、60人余りが亡くなった。疱瘡が収まった時に、慰霊のため高さ2メートルほどの自然石を立てた。その後、道路建設のために移動している。

3-3 時津町の疱瘡関連石造物

現在の時津町元村郷には「俱会一處」の慰霊碑がある(図24)。2021年4月24日に現地調査を行った。調査参加者は筆者の他、野上建紀、石橋春奈と田中正幸である。

この慰霊碑は原爆による被爆死者と天然痘の罹患による病死者の靈魂を慰めるために建てられた。平成29(2017)年、現在の場所に移設された(野上・賈・石橋・田中 2022)。付近には68基以上の疱瘡墓の墓石が今も残る。

4 旧福江藩領(五島藩領)の疱瘡関連石造物

五島市奥浦町南河原の石塔鼻には「三界萬靈塔」が存在する(図25)。2021年8月19～20日に現地調査を行った。調査は筆者と野上建紀が行った。

『五島編年史』には、「文化年間、福江村に疱瘡流行し、御殿では姫君もこれに罹ったので種々医薬を用いて手当をしたが、効果が見えなかった。藩主は奥浦村南河原に一寺を創立し、不動明王を安置して慈雲山一心輕成院と称させ、疱瘡禁圧の祈願をさせた。やがて

平癒の効果現れ、みな恩恵に浴し、以来疱瘡の病根が絶たれた」という（福江市史編集委員会（編）1995）。また、別の記録には「南河原に軽成院跡が寺屋敷として残っており、その海岸には疱瘡で死んだ人の無縁墓が累々としてあった」という（福江市史編集委員会（編）1995）。南河原の郷民は浜辺に捨てられた死者たちを憐れみ、この供養塔を建てて祀った。供養塔の正面には「三界萬霊塔」と刻まれている（図26）。背面には建立年月が刻まれているようであるが、風化が著しく正確に判読することが難しい。「寛政十三年三月」（1801）と読める（図27）。側面には文字はない。

供養塔の隣には説明板がある。それによると、台風12号によって、この供養塔が倒され、昭和53（1978）年に立て直された。その後もまた倒れたようで、近年、再び立て直されている。

5 疱瘡関連石造物の分類

以上調査行った疱瘡関連石造物の分類を行う。

5-1 年代

建立年代から世紀毎に分類する。18世紀は元文3（1738）年建立の萱瀬の「靈魂塚」の1基である。19世紀は寛政13（1801）年建立の南河原「三界萬霊塔」と嘉永5（1852）年建立の平尾・花川墓地の「靈魂塚」の3基である。20世紀は大正5（1916）年建立の「柴山宝塔」の1基である。そして、21世紀は平成29（2017）年に建立された元村の「俱会一處」碑の1基である。

5-2 銘

疱瘡関連石造物の正面に刻まれた銘から分類する。念仏・題目などが刻まれたもの、仏教用語が刻まれたものと石碑の名前が刻まれたものの三種類である。

念仏・題目の方は花川墓地の靈魂塚の正面は「南無阿弥陀佛」と「南無妙法蓮華経有縁無縁法界塔」と並列に刻まれている。柴山宝塔の正面は「南無妙法蓮華経日蓮大士」と刻まれている。仏教用語の方は南河原の供養塔の「三界萬霊塔」と元村の慰霊碑の「俱会一處」である。そして、「靈魂塚」と刻まれていたのは萱瀬の靈魂塚と平尾墓地の靈魂塚である。

5-3 形状

疱瘡関連石造物の形状から分類する。墓碑形と不定形の二種類である。

墓碑形の碑は南河原の供養塔、平尾墓地の靈魂塚、花川墓地の靈魂塚と元村の慰霊碑である。大きさから見ると、南河原の供養塔が三段の土台をもち約2.5メートルの大きさの角柱である。それ以外は通常の墓碑と同じ大きさの石造物である。そして、不定形の碑は萱瀬の靈魂塚と柴山宝塔である。これらはいずれも自然石を加工した石造物である。

5-4 経緯

疱瘡関連石造物が建立された経緯から分類する。まず災害や疫病で多くの人が亡くなると、慰霊碑や供養塔が建てられる。萱瀬の靈魂塚は疱瘡流行直後、疱瘡が収まった後、疱瘡で亡くなった人たちの靈魂を慰めるために建立した石造物である。

そして、五島の南河原「三界萬靈塔」は隔離されて遺棄された疱瘡患者の人々を憐れんで建立された石造物である。

次に種痘療法が普及して、疱瘡が治まった後に建立した例が、平尾墓地の靈魂塚と花川墓地の靈魂塚である。疱瘡感染者の隔離場所となっていた山が閉鎖され、それまでに感染して亡くなった人々を合葬した供養碑であることは前に述べた。

もう一つが、疱瘡墓や遺骨が存在する地や「発見」された地に建立されたものである。西海市の柴山宝塔や元村の慰霊碑などが該当する。柴山宝塔は近代に付近の開拓が行われた際に疱瘡墓が発見されて建立されたものである。元村郷の「俱会一處」碑は道路建設工事の際に墓石や遺骨が発見されて建立されたものである。

6 まとめ

今回の調査結果から、疱瘡関連石造物の建立年代は18世紀から21世紀まで約300年間にわたっていることがわかった。疱瘡が流行した際に建てられたものもあれば、種痘が普及し、疱瘡が根絶した後に建てられたものもある。

災害や疫病で多くの人が亡くなると、慰霊碑や供養塔が建てられる。通常はその記憶が新しい間に建てられる。それは疱瘡も同じである。現在長崎市の一の瀬無縁塔、茂木道無縁塔と大村市の萱瀬の靈魂塚などがその例である。

一方、今回、紹介したその他の疱瘡関連石造物はいずれも隔離政策が生み出した石造物であると言える。五島の南河原「三界萬霊塔」は疱瘡患者が隔離され、打ち捨てられた人々を憐れんで建てられたと伝えられている。

また災害や疫病の時と碑の建立の間に大きな「時間差」があるものが多い。西海市の平尾墓地や花川墓地の霊魂塚は、種痘が普及して疱瘡の脅威が小さくなってから建立されたものである。隔離政策が終わって初めて建立されたものであるため、疱瘡死から長い時間が経っている。

柴山宝塔や元村の慰霊碑などは、疱瘡墓が「発見」されたことによりその霊を慰めるためのものである。柴山の疱瘡墓は近代の開拓によって、元村の疱瘡墓は道路の建設によって発見された。言い換えれば、いずれも「忘れ去られた」土地であった。忘れ去られるだけの時間と空間の隔たりがあったことを示している。

肥前大村・五島は「無痘地」として知られていた。しかし、これらの石造物が示すように、疱瘡流行が発生しない場所ではなかった。発生しても徹底的に隔離するために、「あばた（痘痕）」をもつものすら見ない「痘瘡」のない場所とされたのである。その隔離が人々の記憶から消えるほどの時間と空間の隔たりをもつものであったことを石造物は物語っている。

おわりに

疱瘡は忌避される存在として、感染して亡くなった人たちに関する文献資料が少なく、研究の成果もまだ少ない。今後の研究の継続が必要である。

一方、忌避されたり、差別されたり、あるいは迫害の対象となり、社会の隅に押しやられた人々は疱瘡患者や疱瘡死者だけではない。例えば、潜伏キリシタン、原爆被爆者などの人々も差別あるいは迫害を受けていた。特に、肥前大村・五島では疱瘡隔離地区と潜伏キリシタンの集落は重なっているところが少なくない。事例として、時津町元村郷の慰霊碑は原爆の被爆死者と疱瘡感染の病死者の霊魂を一体的に慰めている石造物である。そして、五島市奥浦町南河原の疱瘡関連石造物から約40メートルしか離れていない場所で潜伏キリシタン墓も存在する（野上・賈・石橋 2022）。西海市の柴山宝塔周囲にも石組墓が一緒に存在する。このように、生活範囲から離れた場所に建てられた石造物の性格は多様であり、差別と隔離が単純な構造ではないことをうかがわせる。この構造を解き明かすこと

が今後の課題である。

参考文献

- 青木歳幸 2018 史料・九州の種痘：「九州地域の種痘伝播と地域医療の近代化に関する基礎的研究」
報告書 27-41頁
- 大村市史編さん委員会 2013 『新編大村市史 第五巻』 大村市役所 307-366頁
- 香西豊子 2019 『種痘という<衛生>近世日本における予防接種の歴史』 東京大学出版会 78-138頁
- 西海町教育委員会 2005 『西海町郷土誌』 昭和堂 760-763頁
- 立川昭二 1984 『病いと人間の歴史』 新潮選書 154頁
- 日本医史学会 1958 『医学古典集（2）松香私志』 医歯薬出版株式会社 80-83頁
- 野上建紀・賈文夢・石橋春奈・田中正幸 2022 「長崎県時津町元村郷の「疱瘡墓」調査」『多文化社会研究』8号
- 野上建紀・賈文夢・石橋春奈 2022 「五島列島の疱瘡墓について」『多文化社会研究』8号
- 野上建紀・賈文夢 2021a 『中尾郷の近世・近現代墓－2020年度「波佐見町文化的景観」に関する基礎調査（中尾山墓地編）－』長崎大学多文化社会学部
- 野上建紀・賈文夢 2021b 「波佐見中尾山の「疱瘡墓」について」『金沢大学考古学紀要』42号 113-134頁
- 橋本伯寿 1811 『断毒論』
- 福江市史編集委員会（編）1995『福江市史』 福江市
- 米沢市公式ホームページ
<http://www.city.yonezawa.yamagata.jp/1795.html>（2021年10月21日 確認）

附表

年代	18世紀	萱瀬の靈魂塚「元文3年」(1738)
	19世紀	南河原の供養塔「寛政13年」(1801)
		平尾墓地の靈魂塚「嘉永5年」(1852)
		花川墓地の靈魂塚「嘉永5年」(1852)
	20世紀	柴山宝塔「大正5年」(1916)
21世紀	元村の慰靈碑「平成29年」(2017)	
銘	念仏・題目	花川墓地の靈魂塚 「南無阿弥陀佛と南無妙法蓮華經有縁無縁法界塔」
		柴山宝塔「南無妙法蓮華經日蓮大士」
	仏教用語	南河原の供養塔「三界萬靈塔」
		元村の慰靈碑「俱会一處」
	靈魂塚	萱瀬の靈魂塚「靈魂塚と疱瘡流行経緯」
		平尾墓地の靈魂塚「靈魂塚」
形状	墓碑形	南河原の供養塔
		平尾墓地の靈魂塚
		花川墓地の靈魂塚
		元村の慰靈碑
	不定形	萱瀬の靈魂塚
		柴山宝塔
経緯	流行直後	萱瀬の靈魂塚
	隔離地供養	南河原の供養塔
	種痘普及後	平尾墓地の靈魂塚
		花川墓地の靈魂塚
	墓石や遺骨 発見後	柴山宝塔
元村の慰靈碑		

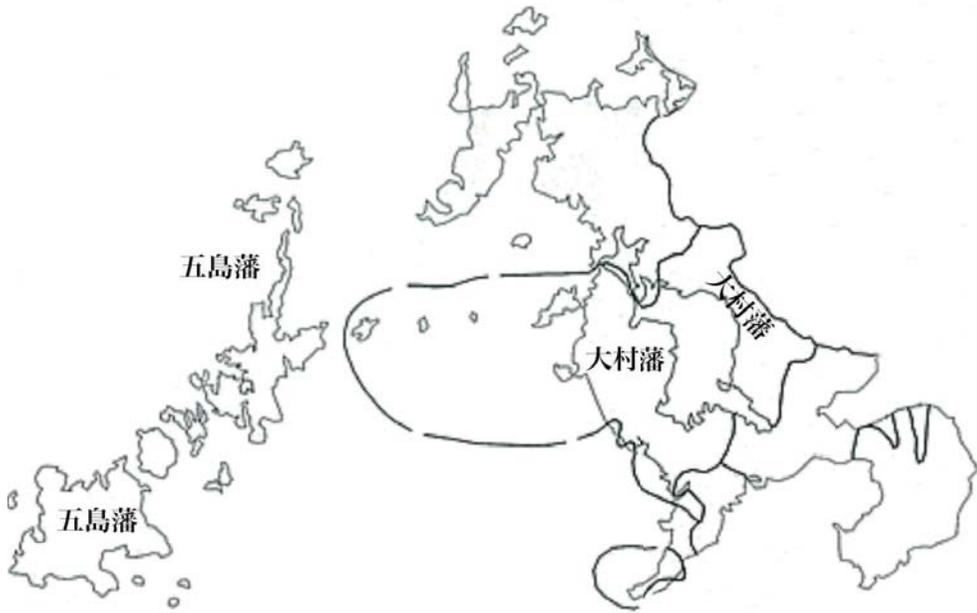


図1 肥前大村藩・五島藩の図

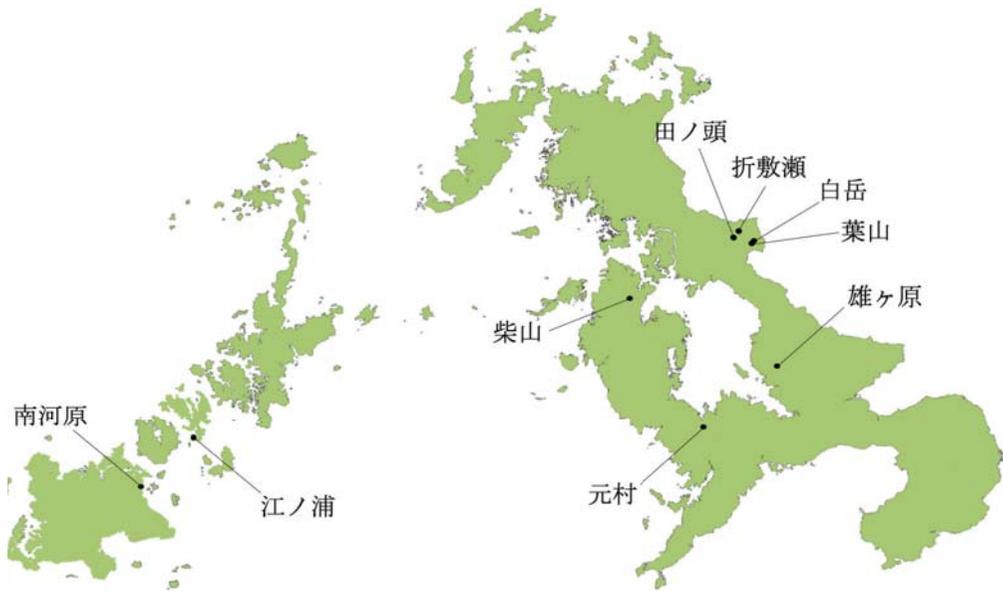


図2 旧大村藩領・旧五島藩領「疱瘡墓」



図3 青銅塔



図4 一の瀬無縁塔



図5 茂木道無縁塔



図6 柴山宝塔と平尾墓地・花川墓地位置図



図7 柴山宝塔全景



図8 柴山宝塔 入り口



図9 柴山宝塔正面



図10 柴山宝塔側面

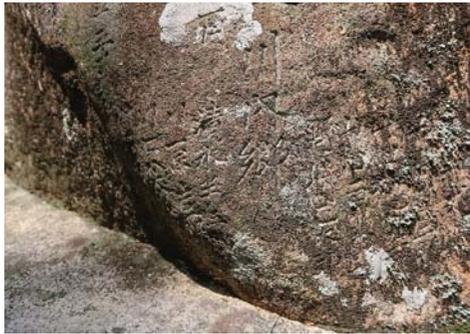


図11 宝塔の土台 (拡大)



図12 墓碑が利用された土台



図13 柴山墓1



図14 柴山墓2



図 15 柴山墓 3



図 16 柴山墓 4



図 17 柴山石組墓



図 18 前島石組墓



図 19 平尾墓地霊魂塚



図 20 花川墓地入り口



図 21 花川墓地霊魂塚正面



図 22 花川墓地霊魂塚側面



図 23 萱瀬靈魂塚



図 24 「俱会一處」慰靈碑



図 25 南河原海岸と「三界萬靈塔」



図 26 「三界萬靈塔」正面



図 27 「三界萬靈塔」背面



図 28 柴山宝塔調査風景



図 29 花川墓地調査風景